幼児期にのぞみ見るものは生涯につながる

―「すてきにするの」再考―

津守　真

私はかつて、粘土の中にボタンを包み込んで、「すてきにするの」と言う五歳の子どものことばを記録に残しておいたことがあった。私自身がその子どもたちの保育に忙しく追われていた最中だったが、こんなに面白いなまの出来事をとっておかなければと思い、その言葉だけをメモにしておいたのだった。我が家の陽のあたる縁側で、長い時間遊んでいた光景は明瞭に私の記憶にとどまっていて、折にふれて思い起こ

す。そのメモを取り出して考えたのはそれから六年後、その子たちは学校に行き、私の手からはなれて、同じ縁側には子どもの影もなく、私は木々の緑をみつめながら考えていた。子どもが素敵にしたいと自分のイメージをもって遊び始める前提には、子どもが安心して何かをできる場が必要であった。保育者との間で落ち着いていろいろためしているうちに、自分が何をしたいかが明瞭になる。（注）

「素敵にする」という言葉に出して言ったのは五歳の子どもであるが、もっと小さいときから同じ願いが子どもの心にあったのは確かである。その子が二歳のときに玄関に飾ったクリスマスツリーに全身が吸い付けられるように、うっとりと見つめて動かなかった。それをどのような言葉で記録にとどめればよいか私は分からなかったが、その姿は私の心に焼き付いてはなれなかった。自分の手で素敵なものを実現したいという望みは常に子どもの内にあり、実現までには大人も子どもも長い時間もちこたえていなければならない。それを探す過程に付き合うのが保育者だと言ってよいだろう。「もしも桜の木に意識があるとしたなら、花が咲くのを待ちつつ過ごす忍耐や期待をどのように表現するだろうか。人間の場合には、その過程に大人が参加しつつ、子どもの内に自らの理想が生まれいずるのを待つ。それは二歳のときにもあるし、五歳にも、十二歳にもある。そして四十六歳の壮年にもある」（一九七二年十二月十三日）と私はそのとき考えた。その晩、ベットに寝にいった下の子どもに、電灯

を消して寝なさいと父親が言うと、せっかくお母さんが一緒に寝ておふとんが暖かくなったのに自分で電灯を消しなさいなんてひどいよと、エンエン泣いた。これは温かさの触覚によって美を実現しようとする子どもである。素敵と思うものは人によって違う。

その翌日、私は朝から保育に出て、いつも突拍子のないことをして大人を困らせるKくんを夕方までみていた。これらのことを考えていたので、その日私はことばを使わないで傍らにいるようにつとめた。ことばを発すること自体が人を束縛する力をもっている。だまって一緒にいると、Kくんの世界が身近に感じられた。弁当をひとりで開いて食べてしまったとき、電話が鳴ると飛んでいって受話器をとったときなど、私はいつもよりも束縛的でなかった。ところが、Kくんが室外に飛び出したときにはつかまえて部屋の中に入れた。庭から柵の外に出ようとしたときには出ないように願いつつかけっこをした。私はこの空間の中だけで自由を保っているのではないということを一日の中で数度痛く思わされた。「子どもが自分のしようと思うことを実現する前には実現をさまたげている私自身の心の中の遮る要素と取り組まねばならぬ。Kくんは私をトイレの中に閉じ込めてその間に何かをしている。私はいかに自分のことだけしか心になかったかを思わされた。それらを経た後に、Kくんは突然レールを並べ、ブロックを並べ、自分で遊びはじめた。ようやく素敵と思うことに向かっ

て進みはじめたのだろう」（一九七二年十二月十四日）。

それから二十五年たった。

私は保育者として、いろいろの子どもの実現の願いに数多く付き合ってきた。ある子どもは皆の中でままごとをしているように見えるがそのままごとは美しく並べることにある。その子はある時期には女の子を描きつづけ、描かれた女の子は毎日素敵になっていった。別の子どもは街の店でどうしても欲しかった色とりどりのビー玉を園にもってきて地面に並べた、その子の繊細な美的感覚によれば並べ方が少しでも違っていてはいけない。しばらく見ているとその美しい並べ方が分かってくるのだが、通りすがりにはそれは見えない。寒い冬の園庭で長い時間子どもと一緒に座っていた母親は本当の教育者だと思う。私の養護学校には屋根に上って太陽が沈むのを飽きずに見ていた子どもがいた、その子の描いたピンクと水色の空の絵を、母親は翌朝持ってきて見せてくれた。旗が風になびくのをいつまでも見ていたい子ども、保育室の窓辺のカーテンがうまく風に揺れるように苦心する先生などなど述べると限りがない。

ことばで表現しない子ども、素敵にしたいと言って主張する子ども、他人に訴えることなく黙ってひとりで追及している青年、ときには社会に挑戦して反社会的になる少年、だれもが自分なりに素敵にしたいことを夢見ている。幼いときにそれを助け

られて実現した体験をもつ人は幸いである。

気が付くと、いま椅子に座って机に向かう私の傍らに子どもはいない。子どもたちの幼いときの私の心を揺り動かしたひとこまひとこまの情景は記憶の中にだけあって、もはや目の前に見ることはできない。そのひとりひとりが十代、二十代、三十代、あるいはもっと先の年齢で、いまなお何かをしようと夢見て歩みつづけている。ままごとの皿の上でなくもっと違うことで、もっと広い舞台で、それぞれなりに素敵なものを実現したいと苦心している。

地平に赤く沈む太陽を、私は先日兵庫の山の中で見た。地平はどこまでいっても遠くに仰ぎ望むものである。ボルノウが言うように地平は最も確かである。幼いときから心に望み見るものを、人間は死の寸前まで追い続けているのではないか。

注　このことを私は『幼児の観察研究―反省と出発』幼児の教育七十二巻五号一九七三年に記した（『子ども学のはじまり』フレーベル館、一九七九年、一二六頁―一三三頁参照）。